
若年性認知症の 1 例

村田 俊輔

(南摂津メンタルクリニック)

18～64 歳人口における人口 10 万人当たり若年性認知症は 47.6 人といわれている。当クリニックがある摂津市の 18～64 歳人口は約 5 万人で若年性認知症は 23 人程度いると推定される。しかし、実際に摂津市地域包括支援センターが把握している患者数は数名と少ない。若年性認知症を発症すると、8 割の方は退職する。働き盛りの現役世代で発症するため、家族の経済的負担が非常に大きく、生活支援のための医療と福祉の連携が望まれる。一方、発症から診断がつくまでに時間がかかる場合が多いのも特徴である。仕事や家事でミスが重なったりしても、それが認知症のせいとは思わず、疲れや更年期障害、あるいはうつ状態など他の病気と誤ってしまう。今回、うつ病を疑われて当院を初診し、若年性認知症の診断で治療を行った症例を経験したので報告する。症例は 50 歳、男性。妻と同居。X-1 年 10 月、32 年間勤めた自動車販売会社で報告義務違反を叱責され、退職した。気分が沈み、妻との会話で怒りっぽくなり、何を言っているのかわからないと言われるようになった。また、スーパーで未会計の商品を持って出てしまったり、駅で切符を取り忘れて、自動ドアにぶつかったりという失敗がみられるようになった。うつ病を心配し、X 年 1 月、当院初診。長谷川式簡易知能検査は 26/30 点と記憶の障害を認め、クロックドロ잉テストは Shulman method で 2/5 点と実行機能障害を認めた。頭部 MRI で内側側頭葉萎縮はなかったが、脳血流シンチで側頭葉は両側性にやや血流低下があり、海馬も左側優位の血流低下を認めた。アルツハイマー型認知症と診断し、ドネペジルを開始した。若年性認知症は進行が早いとされるが、初診から 1 年半後の長谷川式簡易知能検査は 27/30 点と保たれている。一般枠で清掃会社に再就職ができており、早期発見・早期治療の重要性を感じた。摂津市地域包括支援センターとも繋がり、地域で経過を見守っている。